

第29期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第5回 平成23年1月17日(月)実施		
会場	市役所 白山浦庁舎7号棟405	傍聴人	0人
会議内容	<p>1. 開会</p> <p>2. 協議事項</p> <p>(1) 「企業ヒアリング実施に向けて」 意見交換(30分)</p> <p>(2) 「企業による地域の教育力活動について」事例発表と質疑応答(30分)</p> <p>株式会社 博進堂 経営部サブマネージャー 居城 葛明 氏</p> <p>(3) 市民アンケート 速報報告書について(真柄委員、相庭委員、雲尾委員)</p> <p>3. 報告事項</p> <p>(1) 第41回関東甲信越静社会教育研究大会(東京大会)について</p> <p>4. 閉会</p>		
出席者	<p>【社会教育委員】</p> <p>相庭和彦 伊藤裕美子 笠原孝子 川上光子 雲尾周 新藤幸生</p> <p>中村恵子 西田卓司 藤澤真璽 真柄正幸</p> <p>【事務局】</p> <p>八木教育次長 玉木課長(生涯学習課)</p> <p>坂井課長(地域と学校ふれあい推進課) 内山課長(中央図書館企画管理課)</p> <p>和田館長(中央公民館) 窪田館長(新津地区公民館)</p> <p>福島所長(大畑少年センター) 佐藤主査(中央公民館) 白江主査(中央図書館)</p> <p>小川課長補佐(生涯学習課) 原係長 南雲主査</p>		
資料	<p>次第、座席表</p> <p>資料1 地域の教育力 実施企業ヒアリング調査票(案)</p> <p>資料2 「家庭と地域の教育力に関するアンケート」速報報告書 (当日部分差し替え)</p> <p>資料3 「 」意見・自由記述一覧</p> <p>資料4 平成22年度第41回関東甲信越静社会教育研究大会(東京大会)参報告 (笠原委員、西田委員)</p> <p>参考資料</p> <p>資料5 平成17年度文部科学省委託調査「地域の教育力に関する実態調査」報告 /抜粋</p> <p>資料6 平成19年度 家庭教育支援に係る地域の教育力の活性化に関する調査研究報告書/抜粋(国立教育政策所 社会教育実践研究センター)</p> <p>その他</p> <p>資料7 新潟市子ども・若者支援フォーラム 案内</p> <p>資料8 家庭 共育フォーラム講演会 案内</p> <p>資料9 「ニュースレター」NO.9(社団法人 全国社会教育委員連合)</p> <p>当日配布</p> <p>資料10 地域の教育力 ヒアリング調査実施企業 候補</p> <p>樹博進堂 資料(2010 中学校生徒職場体験学習プログラム ほか)</p>		
会議録	<p>1. 開会</p> <p>(事務局)</p> <p>これより第29期新潟市社会教育委員会議第5回を開催いたします。</p> <p>お手元の資料を確認させていただきます。(一省略)</p> <p>ここからは相庭議長から進行をお願いいたします。</p> <p>(相庭議長)</p>		

本日の出席について報告してください。

(事務局)

本日は南委員から欠席の連絡をいただいております。新藤委員から遅れる旨の連絡がございました。新潟市社会教育委員の会議運営規則第9条に定める開催に必要な人数に達していることをご報告します。また、本日の会議について傍聴の定員を5人として周知しておりますが、傍聴希望はございませんでした。

2. 協議事項

(1) 「企業ヒアリング実施に向けて」および(2) 「企業による地域の教育力活動について」

(相庭議長)

発表者の紹介と、進め方についての説明を事務局よりお願いします。

(事務局)

発表者をご紹介します。株式会社博進堂経営部マネージャー 居城葛明様です。

— (株)博進堂の概要紹介 —

(相庭議長)

前半は、実際に企業訪問をしているという想定でヒアリングをおこない、調査項目等について企業という立場での意見も出していただき、今後、分かれて調査実施することになりますので、調査によって導き出したいことについて委員の意識の共有をはかりたいということでございます。後半は、重複するところも多々あるかと思われそうですが、今一度、博進堂さんの取組みについてご紹介いただく時間を設けます。では、居城様よろしくお願いたします。

(居城氏)

皆さん、こんにちは。よろしくお願いたします。

当社は学校アルバムを制作している関係上、エンドユーザーが学校になります。厳密に言えば生徒さんと保護者ということになります。ですから、学校とのつながりが非常に強い企業で、教育とは無縁ではられないという背景があります。

主に取組んでいる活動が三つあります。

一つ目は「中学校職場体験学習」の受け入れです。当初はジュニアインターンシップという名称であったと思います。製造業、流通業の地元企業や幼稚園、保育園などを学校がピックアップして、直接アプローチをかけてこられたのです。当社の方針として、教育活動を積極的にやろうというのがありますので受けさせていただきました。2005年から始まり、6回目を終えました。

中学生ですので、難しい仕事は厳しいということと、期間も3日間ですので、仕事内容を選んでやってもらうことを心がけています。それと、せっかく博進堂にきたのですから、業務だけではない学習内容も用意しています。

ワークショップという手法を用いて相互に彼ら自身の内にあるものを引き出し、自分の持っている大切なものは何なのかとか、自分が学校の中で日頃、疑問に思っていることは何だろうか、そういったことを客観的に観ることも、プログラムの中に一部付け加えています。

最終的には、アルバム制作会社ですので、研修期間中に彼らが自分たちで撮った写真を自分たちで編集、制作したレポートアルバムを持ち帰ってもらうということをしています。担当の先生にも郵送させていただいて、今年の生徒はこんな活動をされましたと報告しています。

二つ目は、「新潟国際情報大学インターンシップ」の受け入れです。もう10年以上の歴史があります。毎年、3名程度の学生を受け入れています。期間は夏休みの2週間です。大学生ですので、ワークショップを含め、かなり高度なプログラムを用意しています。こちらも、最終的にはレポートをアルバムで仕上げるシステムになっています。パソコンも使い慣れていますので、編集方法を少しレクチャーするだけで、楽しみながら取り組んでいます。

三つ目は、「とやの潟校」という活動です。新潟市長潟に「点塾」という自社教育施設を持っています。元々は企業の社員教育を中心に活用してきました。近年は一般向けにファシリテーターという役割とその知識や技術と一緒に勉強しようという講座を開催しています。1984年に開塾し26年たちました。私は当初から点塾のスタッフで、この講座にかかわらせてもらっています。

自社の社員教育はもとより、地元長潟の町内会の方にも施設を貸し出ししたりしています。ただ単に施設の貸出しだけではない活動をと、一昨年から「とやの潟校」と称して地域の子どもたちにも声をかけて、葦笛を作ったり、コーラージュをつくったりと。こちらも、最終的には活動記録を記念アルバムとして仕上げています。これは当社の社員であるプロが全て制作します。

当社ではこういうことをやるのが特別なことではありませんので、全社員がかかわっているわけではありませんが、インターンシップで学生が来たときは、担当部署のスタッフがかかわります。中学生にも懇切丁寧に接していますし、違和感なく社員は受入れていると思います。

私どもの願いとしては、中学生も大学生も地域の子どもたちも最終的には博進堂のファンになってほしいのです。おそらく彼らの中に職場体験がかなり強烈に印象に残っていて、博進堂の名前は忘れないと思います。一昨年の大学生とは、インターンシップが終わってからも3、4回一緒に飲みました。今、就活中で、また話を聞かせてくださいというのです。こういうときにはこういうふうにするというよとか、自分も人事にもかかわっていますので、そんなことを話したりしています。そうしたら、内定が決まりましたとか、ハガキをくれます。非常にうれしいです。そんなつながりを持たせていただいています。

地域の教育力を高めることに異を唱える人はいないと思います。私どもは、最初から地域の教育力を高めるというつもりで取組んでいたわけではないのですが、結果として、そうなっているようです。

(相庭議長)

ありがとうございます。

その次ですが、取組のきっかけもお話をしていただけますか。付け足すことがあれば、お願いできればと思います。

(居城氏)

特に中学生に関しては、基本的に厳しくやるということを心がけています。中学生は、大人と接する場面というのは、おそらく2つしかないと思うのです。1つは親、もう1つは先生、部活をやっている子はまだいいです。中学生が大人と出会う場面というのは、親と先生しかないと思うのです。中学生には基本的な態度や行動に関して厳しく接しています。大学生はアルバイト経験などである程度出来ているのですが、最近の中学生は、一言で言えば「なっていない」です。職場体験学習後に学校からのアンケートに厳しい内容を書いて返信をしました。そしたら先生が生徒を連れて謝りに来ました。多分彼らは全然悪気がなく、そういう経験もない、誰もそういうことを教えていないのです。話をしているときでも、こうやって（姿勢悪く）聞いているのです。おそらく学校でもそうなのでしょう。先生と一緒に謝りに来たときに、私からのアンケート内容を親に話したと言うのです。親御さんはどう言ったかと聞くと「言われるのは当たり前だ」「でしょう？」というようなことがありました。基本態度、基本動作を厳しく、というのが留意点かと思っています。

(相庭議長)

今後の展開については、いかがでしょうか。

(居城氏)

内容的には今のままでよろしいかと思います。幸いなことに新潟国際情報大学でインターンシップ企業として人気らしく、3名枠のところを去年は13名の応募があったらしいです。先生が選抜した3名だったわけですが、今後はできれば私にも面接させてもらいたいと思います。

中学生に関しては、先生に、子どもたちが博進堂を選ぶ必然性をきちんと確認して下さいと言っています。何となく来てもらっては困りますと。初日に私は中学生に言います。わざわざ私は時間を割いているのだよ、だからそのつもりでやってねと必ず言います。プログラムに関しては、自慢気に言いますが、優れたプログラムだと思っています。当社にしかできないプログラムだと思っています。

(相庭議長)

課題というのがありますか。

(居城氏)

一般論になるかもしれませんが、「地域の教育力」というのは、企業にとってピンとこないです。もっと言えば、企業としてのメリットが感じられません。自社の事業とどういつながりがあるのか。多分、ピンとこないと思います。その辺をどういつうに社会教育委員のみなさんがアプローチをかけられるのかなど。

企業は、今不況で厳しいですから、何らかのメリットが欲しいです。一番いいのは有形なメリットですが、無形でもいい。こういうことをやっていることが広まって、企業イメージがアップできることが確実に分かれば。それも短いスパンであること。5年先、10年先というのは厳しいです。しかし、こういう活動というのは、10年くらいのスパンで見ないといけないです。教育というのは簡単にできないと、どこの経営者でも分かっていると思います。「いい取組ですね」で終わると、「じゃあ、やってみましょう」との間の溝は深いと思います。その溝をどうやって埋めていくかというのが一番の課題かと思っています。

(相庭議長)

「地域の教育力の向上のためにどのようなことを望むか」という5番目の項目にも触れていただきました。

(居城氏)

ダイレクトな言い方をさせていただくと、地域より指名されて仕事を当社に出していただければありがたいです。もっと多くの人たちに当社のファンになっていただけたらいいと思います。

(相庭議長)

ありがとうございます。これからご質問・ご意見を受けたいと思います。いかがでしょうか。

(真柄委員)

地域では、地域の祭りや交通安全など、いろいろな取組があると思うのですが、博進堂さんが自分の会社のある地域とかかわる場面で、例えば、祭りに社員が出るとか、またはごみ一斉クリーン作戦とかに企業として出るとか、そういうような活動、地域貢献的なものはあるのですか。

(居城氏)

一昨年、「日本を美しくする会」という全国組織の下部組織として「新潟掃除に学ぶ会」を立ち上げました。当社が事務局となって活動しています。具体的には学校のトイレ掃除をやります。その学校の生徒や先生、父兄も参加されます。他にも県内にいくつかの組織があって、交流して助け合っています。

(中村委員)

職場体験、インターンシップということで、非常に多大になさっていて、質の高いプログラムを提供してくれているということは、来た子たちにとっては満足なものになっているのだろうと思います。職場体験は、文科省では3日になっていますが、中学校では5日以上とはうたっていますが、3日もかなりやっている方かという感じがします。そう考えたとき、ほかの事業でも職場体験やインターンシップでの貢献ということは期待できるころだと思えますし、学校との連携で投げかけやすいところかと思うので、そういう意味で非常に参考になります。

もっと先を言うと、今、博進堂さんと地元のひとつの中学校の子どもたちという形で、点と点を結んでいる線のようにになっている状態だと思うのですが、先ほど西田委員とも話していたのですが、今の子どもたちは、学校や親とかだけの関係で、ほかとの関係がなかなか築けていない。そうしたときにどうつながっていくのか、そのつながりを作っていくときに大事になるのは、どういう活動で、その活動の中にどういう人とのつながりが生まれてくるのかということの方が大事だと思うのです。そうしたときに、新潟国際情報大学だけではなくて、例えばうちの青陵大学や、長岡の造形大学のデザインとか、全然違う専門の子たちがインターンシップして、一つの場の中でやれるようだと、相乗効果でモチベーションが高くなるという気がするのです。それを作り出すときには、学校と企業だけのつながりではなくて、さらにもう一つ上とのつながりをどう作っていくかと、プログラムできる、提供できるころが必要になると思います。そういうことがこれから必要になってくると思うのですが、そういうことに関して何かご提言とか、知恵とか、もっとこうした方が上のステップに行けるとか、例えば中学校の職場体験で何々中学校と何々中学校と一緒に来る、そうする

と、その中学校の子ども同士につながりがあると思うのです。そこら辺のところはどうでしょうか。

(居城氏)

中学校は難しいかもしれません。公立である中学校同士がつながるには、教育委員会が動くことになるのでしょうか。大学の場合は、できなくはないと思います。ただし、これを一企業が無償でコーディネートするということは、かなり厳しいです。そこで、参加費云々となったときに、学生が払うのか、それとも、大学が払うのか。参加費の出所、その辺の設計も必要になってくるのかなと思います。

(中村委員)

大学の中でパンフレットだとか、実践的な活動とうまく結びつくようなこともあるとすると、どうでしょうか。難しいですね。

(西田委員)

大学を横断して、メンバーが集まった方が、そこで生まれるものなどから付随して企業のメリットに関しては、何か高まるように思います。

(居城氏)

新潟国際情報大学だけにこだわっているわけではなくて、たまたま10年前に縁があって、以降、毎年続いてきたのです。他の大学でも全然かまわないわけですし、常に門戸は開放しています。ただし、受け入れ時期と期間は限定にはなるでしょう。プログラムにもよりますが、可能性はあると思いますし、その方が、点から線、線から面にという可能性は大いにあると思います。

(中村委員)

何であっても、こういうものが必要になってきているというか、そういう方向にシフトしていく、そこがまた難しいところではあるのでしょうかけれども、いかに面にしていけるかというのが、いろいろところで求められてくるのだと思います。

(居城氏)

西田委員のところとは、当社の社員と接点もありますし、西田委員もそういう活動をやっておられるのですけれども、インターンシップに限らず、せっかく「点塾」という場所がありますので、ここでいわゆる大学に話しかけて、それこそワンコインとか、参加費をいただいて、そういう集まりでやるというやり方も、可能性としてはあります。

(相庭議長)

ありがとうございます。それでは、もうだいたい事例報告をさせていただいているのですが、引き続きよろしくをお願いします。

(居城氏)

繰り返しになるかもしれませんが、「とやの潟校」からお話をさせていただきます。

当社には「点塾」という研修施設があって、単に大人だけの研修会、勉強会だけではなく、地域に何らかの形で役に立てないかという発想から始めたものです。2009年からスタートしました。近くに鳥屋野潟もあり、ビッグスワンまで歩いて10分くらいの距離です。その辺一帯をフィールドとしてみようということで、取組みました。子どもたちを集めて、葦笛を作ったり、野外ゲームで遊んだりしています。プログラムとしては1部、2部、3部と分かれてやりました。第1部が「潟コラージュ」。これは鳥屋野潟にテントを張ってやりました。コラージュというのは貼り絵みたいなものです。草や葉っぱも素材として使いました。

第2部は、2週間後に、ちょうど「水と土の芸術祭」があった年でしたので、地域イベントとしてやりました。長潟の地域の人に来ていただいて、潟の昔の物語の語り部をやって頂きました。そんな活動が「とやの潟校」です。事務局が博進堂というだけで、企業の色がまったく出ていない活動だと思います。

中学校の職場体験学習は毎年7月の第3週頃にアルバム制作が何もない時期です。アルバムがない中から中学生にいかにか何かをしてもらおうかと、工夫してやります。まず、本社・工場を見学してもらいます。子どもたちに人気なのが「会社ゲーム」という会社経営のシミュレーションゲームです。これは社員研修のプログラムの一つで、それを中学生にやってもらうことで、会社の成り立

ちと仕組みを学んでもらうことが目的です。他に原稿袋を再生する、簡単な作業をひたすらやってもらったりしています。

最終日は、アルバム制作になります。体験学習の期間中、会社のカメラを彼らに貸して、写真を撮ってもらいます。お互いに撮りあいっこしたり、私が撮ったりしたものを素材として使います。

文章も自分で書いて、最後まで仕上げてもらいます。帰るときには、お疲れ様と言って渡します。

新潟国際情報大学のプログラムには、かなり多くワークショップの手法を取り入れています。毎朝、必ずやるのが「チェックイン」。中学生でもやっているのですが、今現在の心境、これをお互いに確認し合います。「昨日寝るのが遅くてちょっと眠いです」とか、何でもいいのです。ホテルにチェックイン、チェックアウトがあるように。研修や講座、仕事でもやった方がいいと思います。当社では毎朝やっている部署もあります。

「Good & New」は24時間以内で気がついたこと、もしくはどんな小さなことでもいいから、心地良かったことを紹介し合います。「マイゴール」というのは、今日1日終わった時点で、自分はようになっていたいか、1日の成果目標を最初に掲げるわけです。そうしますと、何となく2週間過ぎさずに、1日1日を密度の高いものにして、自分で成果を確認できます。

8月25日のプログラムでは、午後からは「一枚の自己表現」「集団インタビューゲーム」。インターンシップに来る学生は3年生。当社の新入社員に対して、この時期はどういうふうな学生生活を送ったかというようなインタビュー時間も設けました。

8月26日の午後は、私が加茂市から「学校教育研究協議会夏期研修」の講座の依頼を受けて、彼らも同行しました。研修の取材ということです。この内容も当社独特といえますか、たまたま私にそういう仕事があるものですから、タイミングが合えば、学生も一緒に連れて行くことにしています。

8月30日の「コラージュ教室」は当社で毎年やっている行事で、全社員参加します。学生たちも一緒にやってもらいました。「未来デザイン」は、問題解決学の一つの手法です。「人生の目的は何か」という究極のテーマで始めます。20年ほど生きてきて、恐らく一度もそんなことは考えたことがないでしょう。縁あって博進堂にインターンシップに来たのですから、そういった究極のテーマで取り組んでもらっています。

インターン期間中、他にも社内行事があったら、必ず一緒にやってもらいます。9月3日は午後から2011年度実行計画づくり。これは全社員百何十人が一堂に会して、各職場の新しい年度の実行計画づくりをやるものです。近くの体育館を借り切ってやりました。最後の2日間はアルバム制作に充てます。2週間のインターン期間中の写真は膨大な量になります。その中から選び抜いて編集します。アルバムはさすがに当日にはできません。後日、完成した段階で、アルバム打ち上げということで飲み会をやるのが恒例になっています。

『教育通信 点から2011はる』は、「点塾」の広報紙です。ファシリテーター型リーダーを育てようということです。もともと「点塾」は企業のリーダーを育成するという目的で開塾しました。塾長の清水義晴氏が博進堂の先々代の社長でした。「日本型」というのを頭に載せたところ、反響がありました。

今年は「守・破・離」ということで能の概念を持ち込みまして、第1章の「守」というのは守るということです。流儀をもって励むことと、型を徹底的に学ぶということです。第2章の「破」は、ほかも研究してみる、今までの型を破ってみる。「離」は完全に固有の境地を拓くということで、自分のオリジナルを生み出そうということを目論んでいます。

(相庭議長)

ありがとうございます。大変幅広い教育活動をお話いただきました。それでは、委員の皆さんからご質問を受け付けたいと思いますが、ご質問はいかがでしょうか。

(中村委員)

中学校の場合、学校で博進堂さんの活動に入る前に、プランということで各学校でほかの子たちも交えて計画し、実践に入って、学校に帰ったら互いに相互評価があったりすると思うのですが、そこら辺で、学校ではこういうようなことで子どもたちに計画を立て、このようにやっていますと

というような学校とのやり取りの中でのPDCA (Plan-Do-Check-Action) と、活動の中にPDCAと細かい感じに入っているかと思うのですが、そこら辺のかかわりはどうなのかということ、中学生と大学生は違うのかどうか、大学の場合はそういうことがないのか、それとも大学との事前の打ち合わせというものがあると思うのですが、そこら辺の関係はどうでしょうか。

(居城氏)

中学校とそういうふうなやりとりはないです。言葉は悪いですが、丸投げです。私どもからすれば逆にありがたいですが。

(中村委員)

丸投げされると、大変なこともいっぱいあると思うのですが。博進堂さんは丸投げされてもいい、大丈夫と思うのですが。

(居城氏)

当社は特殊だと思っていただいた方がいいかもしれない。普通、丸投げされたら困ると思います。日程も学校で決めています。こちらの都合は確認されたことはないです。「もし、その日程が無理なら、お断りいただいても結構です。」みたいな感じです。受け入れ人数の問い合わせはあります。

職場体験学習の内容に関しては、何のリクエストもありません。

(中村委員)

大学生も同じですか。

(居城氏)

大学は、事前に先生が学生を連れてこられて顔合わせして「では、いついつからよろしくお願ひします。」その程度です。中身に関しても、何もない。ただ、大学の場合、先輩の歴代のレポートアルバムが学内に並んでいるのを見て博進堂を選択してきます。こんなにおもしろそうなら是非と思うそうです。おもしろいに決まっていますよね。この内容は絶対におもしろいと思います。

(中村委員)

大学生はそれでいいような気がするのですが、中学校の場合、キャリア教育という視点からいくと、行く前にプランがあつてと思うのですが。

(藤澤委員)

居城さんが言われるとおり、基本的には受入れ企業に全部任せます。ただ、その前の指導は、もちろんいろいろやります。ただ、そうしないと、先ほど居城さんは丸投げされると大変だろうとおっしゃいましたが、逆に、これこれこういう内容をやってくれと言われたら、まずお願いする段階で、ほぼ撥ねられると思います。ですので、現実の社会の様子を体験してくださいということで、その後、体験したものを子どもたち同士でお互いに発表し合う、これだけです。多分ほかの学校も基本的に同じだと思います。

(居城氏)

そう言われればそうですね。こういう内容で指導してくれと言われたら、受けられる企業はいいですが、それは無理です、という企業が増えるのではないのでしょうか。基本的に貴社の仕事で中学生にふさわしい仕事、学校で体験できないようなことを学習させてやってくださいというような依頼です。それだったら、企業色が出せます。ただ、製造業は難しいみたいです。機械を扱っているので、子どもたちに怪我をされるのが怖いです。そういう意味では、スーパーなどの流通関係ですといいらしいです。商品を運んだり、並べたりというのはいいみたいです。

(藤澤委員)

製造業、博進堂さんも製造業だと思うのですが、我々がお願いする限度というのは、例えば、自動車の修理工場などですと、まだ中学生ができることだけさせてくれます。製造関係は、私のこれまでの経験の中で、1社もお願いしたことはありません。

(居城氏)

去年はちょうどアルバム制作をやっていたので、ほんのさわり程度やってもらいました。これはお客さんのところへ届けるからね。研修のための研修ではないよと言いました。

(真柄委員)

「点塾」についてお聞かせください。塾長の清水義晴さんは地域づくりに関しては国内でも第一人者ということで、点塾を卒業した方々が、地域づくりとかかわりを持ちながら、学んだことを生かすということは、具体例として何か、こういうものがあつたとか、ありますか。

(居城氏)

参加者が様々な分野から来ています。昨年で言いますと、20名の限定のところを30名くらい受入れたのですが、3分の1が企業。あとはNPO。特に地域づくりとか企業にこだわってはいません。たまたま企業が多かったということです。地域づくりの人たちもいないわけではないですが、「NPO法人 まちづくり学校」が中心になって講座をやっている関係上、点塾ではそんなに地域づくりの方は多くはないです。今後は地域づくりとか企業の枠を超えたつながりの場を考えています。今年には昨年の卒業生が集う会を企画しています。

(雲尾委員)

今、まちづくり学校の話が出ました。「地域の教育力」に対して博進堂さんが直接主体となって取り組んでいるお話だったのですけれども、ファミリーフレンドリー企業としてとか、家庭教育支援、子育て支援、社員が働きやすい職場づくり、その中で社員の皆さんが地域づくりの主体になっている、つまり間接的に地域の教育力の主体となる人を育てるような仕組みというの、かなりあると思います。そういう点に関連して、今日のヒアリングの内容について、何かご助言いただければと思います。会社としては、地域に出ていって、例えばクリーンアップとかはしていないとおっしゃいましたが、例えば、社員一人一人が自分の地域の中で地域づくりをするような、そういうような雰囲気がありますよね。

(居城氏)

雲尾委員がご存知なのは、うちの社員でも限られた一部の人だと思います。確かにそういう社風はあるのですが、地域活動をしているのは1割いるか、いないかではないでしょうか。私にしても、地元では何もしていません。昨日、たまたま「さいの神」があつて、孫を連れて行つたくらいで、あとはかみさん任せです。それでいいのかと、思っているのですけれども、よくないだろうと思いつつも。

(伊藤委員)

私は、子どもがもう23歳ですが、その子が中学校3年生のときに、地域の中学校の会に居城さんに先生として来ていただいてやったことがあります。その後、ワークショップのテキストも購入しまして、福島潟でNPO法人の活動をしているので、潟先案内人の養成講座のなかでは、その手法、いろいろな人の考えを引き出すというノウハウを私自身も活用したりしました。中学校での取組では子育てについてグループ討議して最後に発表するというスタイルを、初めてファシリテーターのご指導の下、保護者に子育ての振り返りや、将来の夢を描くという活動をして、思い出深いものでした。

環境についても、「とやの潟校」は、企業として水や紙を使つたりするから環境について配慮した企業経営をしているという、その辺もアピールというか、工夫してところがあるのか分からないのですが、鳥屋野潟の点塾というものを通じて、環境へのご恩返しをされているのかなという印象だったので。

(居城氏)

特に環境という意識はなかったですね。

(伊藤委員)

例えば、紙を使うから、ヨシみたいなものをやつたりすると、商品への開発になるかもしれないし、あと、企業イメージのアップということで、環境教育というものをされるとか。メリットがないと、ボランティアでは続けられないとおっしゃつたので、その辺も根気のいることですが、子どもたちを指導する人の指導力というか、育成も社員教育、訓練になると思うので、そういうことに活用して、お金はもらっていないけれども、目に見えない収入があるのかなと思つたのですが、いかがでしょうか。

(居城氏)

環境というのは、結果としてそうなったというふうにも受け取られるということだと思います。特に最初からそのねらいはなかったと思います。たまたま鳥屋野潟というところが、歴史を紐解いていくと、アシとかいうものがあったということみたいです。最後におっしゃった、いわゆる子どもたちを育てるための人を育てるのだというのは、言えていると思います。そのねらいは、ずっと最初から持っています。

(藤澤委員)

では、ズバリ聞きたいと思いますが、先ほど企業としてのメリットというのが見えないと、とお話がありました。私もまったく同じだろうと思います。学校にとってみると、「地域の教育力」というのは、組織にとっては非常に重要でメリットがあるのですが、ずばり、企業一般としてでもよろしいですし、博進堂さんでもよろしいのですが、どんな活動ならメリットがあると思われるでしょうか。

(居城氏)

当社に限って言えば、今の活動でも十分メリットがあると思います。新潟国際情報大学のインターンシップのプログラムに掲げてあるのですが、インターンシップ受入れ目的があります。3つありまして、①「博進堂でしか味わえない学外実習プログラムを提供する」②「自らの存在価値や役割を考える機会を提供する」③「博進堂のファンにしたい」と。長い目で見れば、地道な活動になりますが、多くのファンを獲得できたなら、博進堂を指名してくれるのではないかと期待しています。これは私の切なる願いです。そういう意味では、うちはこういう活動は今後もずっとやっていこうと思います。業績云々は別にしてもやっていくと思います。

ただ、企業一般としてはどうでしょうか。そこに気付くかどうかだと思います。短い期間ですぐメリットがほしいのかどうか。それとも、ある程度そういうことを超えて長い目で見られるのかどうかではないでしょうか。こういう活動をやったからといって、来年、すぐ業績が上がるというのは、まず考えられない。そこに経営者の価値観が出てくるのではないのでしょうか。私が皆さんと同じ立場だったら、どうやって企業にアピールしていくかというのは、結構難しいです。

(西田委員)

中学生の今のトレンドというか、よく分からないですが、これから彼らの関心事みたいなものを引き出していくというか、何か簡単に商品をイメージするけれども、何かそこに生かすようなプログラムというのは、考え方によっては可能なのでしょうか。

(居城氏)

中学生でやってみて思ったのですが、ワークショップというのは、かなり抽象思考が中心だと思ったのです。中学生は、抽象思考が難しい。具体的にもっていかないと、なかなか理解してくれないです。例えば、「一枚の自己表現」といって白い紙を渡して、自分自身を表現してくださいという自己紹介の手法があります。大学生は、抽象画のような作品をつくりますが、中学生は、部活の道具を描いたり、ほとんどが具象です。そういう意味では、自分の内部を引き出すというのは口で言うのは簡単ですけど、中学生を相手にしたときは、こちらの技量や資質が問われます。高度なものを求められます。中学生はこちら主導で「具体的な与えるプログラム」を設定しないと気の毒だなと痛感しました。初年度、分からなかったものですから、大人の感覚で「抽象的な引き出すプログラム」でやったのです。そしたら、こういうのは苦痛だと言われました。整理整頓のような単純作業の方がずっといいと言われたのです。私だったら、たまらないと思ったのですけれども。そのとき、自分の目線、スタンス、物差しだけではだめだということを学びました。中学生には訊いた方がいいです。これをやってみてどうかと。彼らは正直ですから、おもしろくないときははっきり言います。

(伊藤委員)

一般的に企業としてではなく、博進堂さんについてということで。ワークショップとか、抽象的に考えられるような、引き出すというのが、中学生たちはそういうのができないとおっしゃいましたが、中学校を出て社会に出る人もいます。そういう引き出すような手法を学校で活用するということが魅力があるのではないかと思っているときに、教育関係ではメリットになりますけれども、

そういう手法を商品にして、教育の子どもたちの内面を引き出す、一方通行の教育ではなく、機械やゲームだけで遊ぶ、人と人のふれあいがなかなか持てないという今の子どもたちに、内面、自分の殻を破るきっかけとか、私にしたらその手法を教育商品開発という意味で、そういう機会があれば、私の孫が学校に行く頃には、そういう学校だといいいのではないかな、孫と議論できるおばあちゃんになりたいので、そういうメリットというか、教育関係ではそういう勉強もしていますよと、というようなことではいかがでしょうか。そういうビジネスチャンスは。

(居城氏)

もう6年くらいになりますが、新潟市教育センターから毎年声をかけていただいて、幼・小・中・特別支援学校の先生方の研修会にお邪魔しています。特に新任研究主任の先生方を対象に、毎年8月の夏休み中に60名くらいに、ワークショップをしています。今までに延べ人数600~700人くらいの先生方がワークショップを受講されています。そういう意味では、これも長年続けていけば、じわじわと、地域の教育力が上がるのかなと思っています。

(相庭議長)

よろしいでしょうか、私もいくつか聞きたいことがあるのですが、休み時間までつぶしております。居城さんのお話が上手で、皆さんの意見を引き出すのがうまいものですから、つつい時間過ぎてしまいました。では、まだ十分に議論したいところがございますが、予定の時間を既に10分過ぎています。以上をもちまして、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

(居城氏)

ありがとうございました。

(休憩)

(相庭議長)

再開します。3番目の議題「家庭と地域の教育力に関するアンケート」の速報報告書に入る前に、先ほど用意いたしました実施企業のヒアリング調査票でございますが、これでよろしいかどうか、修正がございましたら、ご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。取組んでいる現状と取組のきっかけ、今後やってみたいこと、課題とその解決策について、地域の教育力の向上のためにどのようなことを望みますかという5問です。6番目については、出前講座・講座形式の活動についてお願いができるかどうかですので、これはいいとして、1から5番までですが、その中で、先ほど居城さんに意見を聞いて私のほうで流してみたいのですが、あのようなお話になったということ。いかがですか。もうちょっとこの辺はこういう形の方が聞き取りしたいことが聞けるのではないかというのがございましたら修正ということになります。

(伊藤委員)

これが基本だと思います。ただ、具体的にというか、これから知りたいこととして、やっている取組を広めるためには、誰がやっているか、経費はどうか、企業によって負担もあるわけですから、メリットは何かとか、答えやすいもの、その辺を聞きたいですし、やってみて大変だからやめたいという気持ちがあるかもしれない。その辺がどこかにもし織り込まれていたらいいと思いました。

(相庭議長)

ずばり聞いた方がいいですね。もっとはっきりということですね。

(伊藤委員)

具体的に。そうすると、この企業はこれと項目にあてはめれば、どういう企業が乗るかとか、私たちが発掘したいわけなので。

(西田委員)

お仲間ですらうのをやっているのを紹介してもらおうということはあるのでしょうか。

(笠原委員)

紹介してもらったら、(訪問ヒアリングを)追加してやれるのか、どうなのでしょう。紹介してもらったことが可能なこともあるわけですが、紹介してもらって、予算もないし、時間が取れなかったでは困りますから、そこを確認してからですね。

それと、実際に訪問するときに、キャリア教育で子どもたちを受け入れているようなところの話だけでなく、あくまでも「地域の教育力」というところにつなげていくような聞き取りをしていたきたいと思います。

(相庭議長)

ほかに、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、「家庭と地域の教育力に関するアンケート」、お手元に資料2が配られております。それでは、これにつきまして、事務局より全体について説明願いたいと思います。

(玉木生涯学習課長) — 説明 —

(相庭議長)

アンケートの自由記述欄におもしろい意見がいっぱい出ていて、こういうものかと思って読ませていただきました。

それでは協議に移る前に、検討委員会の分担ということで、「家庭の教育力」について真柄委員、「地域の教育力」が私、その後、「活動」について雲尾委員ということで、ざっと眺めてみて、どうということだろうかということをお話ししていただくということでございます。書いたものを用意する方がいいかどうかという議論もあったのですが、書いてしまいますと確定の要素が非常に強くなって、実際に文を書きますといじれなくなる傾向が強いので、ここで皆さんから自由に意見をいただいて、そのうえでそれを念頭に置きつつ、各検討委員の個性を生かして書いていただくというふうな方向でいきたいと思っています。まず、真柄委員から、どんなものだったのかということでお話いただければと思います。

(真柄委員)

8ページの「家庭における教育力」の中身としては、国の調査とだいたい同じ傾向が出ています。私が気付いたのは、社会とかかわる基礎となる力、かかわりというか、こういうことを非常に重視しているなど感じました。この項目については、性別や地域、職業について大きな変化がなく、全体に同じ傾向が出ていると捉えました。

9ページ「今の家庭の教育力はどうなのか」では、先ほど課長が説明したように、国では「低下している」というのが8割です。新潟市は6割。全体から見ると、新潟市の方は、それほど低下しているとは思っていない、というふうにとらえられる感じがしました。ただし、年代別に見てみますと、低下していると感じているのは30代から50代、子育て世代といえますか、この人たちが低下していると感じているということが分かりました。特徴的なところは、特に低下しているのを、区ごとに見ますと、中央区と西区が多い。それに対して秋葉区、南区、西蒲区の数字がやや少ないというふうに見えます。都市部が低下していると思っていて、農村部といえますか、そういうところは低いと思っていると言い切れるのかどうか、これは数値をよく見直さなければと思います。勤め人と自由業の人は、低下していると思っている人が多いのですが、農林漁業に携わっている人は、「低下したと思わない」が多いといえます。

10ページ「低下したと思う理由」について、これも傾向としては国と同様な傾向です。「過保護・過干渉」「しつけの問題」が出てきています。具体的に見ていきますと、過保護・過干渉については、年代的には20代、30代が6割と他の年代に比べて非常に高い数値を示していきまして、若い世代は過保護・過干渉というのを低下した理由に挙げている傾向が見られました。50代、60代は何を挙げているかということ、「核家族など家族間のかかわり」のところを、5割近くの方が感じているということで、年代によって低下した理由の捉え方が違っているということが見られました。

理由のトップは「過保護・過干渉」ですが、2番、3番に「しつけや教育の仕方が分からない」「しつけを教育機関に依存している」がくるのですが、子どものいない人という人で、10ポイントの差がありました。子どもがいない人のほうが「しつけ関係」を理由として選ぶパーセントが高い。そういうところに、特徴的な数字が出ていました。

10ページ、合わせて全体として事務局にお話をしておきたいのですが、要約のところの下から3行、ほかのところとは異質で「その他の意見では」として、項目にない表現が書かれています。記載についてあとで検討した方がいいのではないかと思います。

11 ページ「子どもの頃と比べて子育ての状況をどう思うか」の特徴的なところで、男性と女性では、「困難に感じている」は女性が多い。男性に比べて5ポイントの差があります。年代別にも特徴がありまして、50代は7割を超えて「困難になっている」と思っています。その次は40代、60代と続くのですが、一番若い20代は57パーセントで最も低い。一番高い50代とは13ポイント違います。どちらも50パーセントを超えていますから傾向としての差はないですが、年代での違いが見られると思います。区による特徴が見られまして、「困難になっていると感じている人」は、秋葉区は58.6パーセントで、ほかの区に比べ低かった。東区は70.1パーセントで区による違いも見られました。

12 ページ「子育てが困難な状況の理由」では、意外と違いが出てきているところがありました。全体のトップは「子育てにかかる費用が増加」です。女性のトップも同じですが、男性のトップは「子どもと過ごす時間が少ない」です。男性と女性との意識の違いがあります。下から4番目「安全に対する不安が増大している」は、女性は男性に比べ12ポイント高い。この項目では、子育て最中の30代、40代では3割を超えており、他の年代と比べ高くなっていました。「子育てにかかる費用」も、子育て最中の40代は5割を超えていますし、続く30代は47パーセントです。30代、40代の子育て真っ最中の人たちがそのように感じています。

ここで私が非常に特徴的に見ていきたいと思っているのが、区による違いです。「子育てにかかる費用の増加」では、南区が54.5パーセントと最も高い。同様に5割を超えているのが西蒲区と東区です。中央区は36.8パーセントで、ポイント数でいくと、相当な開きがある。区による数値のばらつきが、「子育てにかかる費用」に出ました。また「身近な相談相手がいない」という項目についても、中央区と西区では3割を超えているのですが、西蒲区17.1パーセント、南区18.2パーセントで2割以下と、大きな差がある。地域の教育力との関連を見ていきたいところだと感じました。

「安全に関する不安」は先ほど女性が高い、子育て世代が高いと申しましたが、区によっても特徴的で、江南区は18パーセントと低いです。最も高いのは東区の29.5パーセント。11ポイント差ですが、区によって安全に関する考えに違いが出ているということも感じました。

団塊の世代は、「子どもと過ごす時間が少ない」を理由に挙げている人たちが5割と最も高い。

13 ページ「新潟市が行っている施策」では、一番高い「図書館での読み聞かせ、おはなし会」でも半数以下ということで、これについては周知の必要性を強く感じた項目でした。そして、圧倒的に女性が男性に比べて高い数字が出ています。男性には周知が図られていないのか、分からない。実際に使っているのが女性なのかと思うわけですが、トップの読み聞かせに対しては、男性は32.5パーセントという数字に対して、女性は57.7パーセントと半数以上です。15ポイント以上の差がある。周知がよく図られる年代は、30代、40代が全体的に高い数字になっています。

施設の設定状況ごとの違いなのか、区にばらつきが出ているということが分かりました。利用されている区は数値が高いし、あまり広くて分からないところでは数値が低く、区によるばらつきがあります。区によるばらつきについては、調査結果をもとに周知を図っていく必要を強く感じました。以上です。

(相庭議長)

ありがとうございました。

続いて私の担当ですが、社会教育委員は自由な問題意識を持っていいので、印象的なことから話しますと、日本社会の停滞を非常に印象づけるアンケート結果になっていると思います。

(14 ページ)子どもたちを育てる地域の教育力の要素、地域支援として、「子どもたちが身につける力として特に大切なことは何か」と聞いている。高い数値が出ると思いましたが「いろいろな立場の人を受け入れる心を育む」「自分を大切にすることを育む」「歴史・文化等を大切にすることを育む」が、もう少し数値が出ると思いましたが、つまり、自我にかかわることですが、グローバル化してきて地域社会の特色を前に出していけないとこの社会はつぶれてしまいます。また、個人の自己主張は人権を守っていくうえで非常に大事な視点です。そういうことについて、驚くべきことに「自分を大切にすることを育む」ということが3.2パーセントです。

次に「大切なこと」は「人を思いやる心」かと思いましたが、それよりも「社会生活に必要な

なルールやマナーを身につける」が多かった。これは秩序を大事にしているということですが、秩序を大事にする心というのは、発展と可能性を掴む論理と表裏一体です。秩序が大事だ、大事だと言えば、ことが老朽化しても変える力が生まれてこない、そういうことを表している。さらに「知識・理解を深める学習への関心を高める」が3.2パーセントで、学校教育は何をやっていくのだという話です。

およそ社会教育でいう、最も力を入れる社会教育活動がきわめて低く、むしろ社会教育活動の中では、伝統的とでもいう、女性差別はこれでいいのかと訴えているところに対しては、いいのだという気持ちが強いということがあらわれている。市民全体がきわめて強い保守的意識を持っているということです。

「基本的なルール・マナーを身につける」では、高齢ほどゆるく、若い人ほど強い。これは何を意味しているかという、可能性がないということです。高齢の方が「ルール・マナーを守れ」と言うのであれば、まだ若い人たちの反発心で世の中が動くかもしれない。ところが、20、30、40代、社会を作って変えていこうとしている人たちが社会ルールを守ろうとして、70代以上は過半数以下です。まず、驚いたのがこの点です。

(15 ページ)「自分の子ども時代と比べて地域全体で子どもたちを育てる雰囲気やしくみはどのようだと思うか」。資料3の自由記述の中で、行政サービスは大変よく行き届いているという声が出ていました。(資料3 自由記述 38 ページ)「私達の子どもの時代は戦争の中、その教育を受けた者にとって今の子どもは幸せ一杯・・・」という意見が出てきます。高齢の方によるものと思われる自由記述の中です。自由記述というのは考えがないと書けません。そういう人たちは地域で子どもを育てる仕組みや雰囲気にはプラスです。

(16 ページ)「低下した理由」ですが、先の「自分を大切にすることを育むこと」は大切でないという裏打ちには個人主義が浸透している、だから、自分を大切にすることはいいのだ、個人主義は大事なのだとなってしまう。社会教育というのは、個人の自己実現を支援しているシステムですから、市民の意識形態に働きかける方向性を考えていく必要があると考えました。

「親や大人の労働時間が長くなってきている」は低い。また、生涯学習では地域リーダーの養成は大事な要項で、いろいろ働きかけをしています。リーダーが不足したから低下したのかということ、リーダーの不足は高くない。地域の祭りや交流の機会は不足しているとは思わない。リーダーシップに対しての論理が少ないかということ、それは十分だけど、出てくる個人主義はいやで、ルール・マナーについては強い意識を持つ、こういう像が出てしまいます。

そういう中で、人々の行動範囲が広域化しているから低下しているかということ、その理由も少ない。都市化も理由としては高くない。「個人主義が浸透」「人間関係が限定的」という、この二つが高いと隣近所の人たちとの付き合いというのはもめるのです。ところが、(次の設問で)隣近所の人たちとの付き合いはいいのです。これはどう理解していいか。

(17 ページ)気になるのは、交流していないという人が1割です。隣との交流なく孤立して、孤独死の可能性が出る。個人主義や権利意識と共同性とのバランスが崩れてきているのだろうと見れます。共同性を打ち出すと同時に、個人の自由や個人にきちんと目を配らなければいけないけれども、そのところのバランスが崩れてしまうというふうに見ています。

(18 ページ)「住民どうしのつながりが深まるために必要なこと」では、「地域の中で相談できる人がいる」「子ども会や団体活動がある」こそ、つながりが必要と思うだろうと読んでいましたが、「あいさつがよく行われること」が高い。これはどう考えるか。確かに学校教育であいさつ運動をしたから、その成果は上がってきているし、地域住民もあいさつが大事だと思ってきているというのは、反対はしません。だけど、学校の活動に地域の人々が参加したりすることとか、あるいは地域の中で相談ができる人とかとに比べたら、表面的な答えが多いと捉えました。

この傾向は年齢層の若い人ほど強く、年代があがるほど弱い。保守化の傾向と平行線をとります。若い人ほど表面的な付き合いは大事だけれども、あとはいいという部分が強く、その人たちはどちらかというと、ルール・マナーを守ってくれと言う。弱い個人主義と昔言いましたが、近づくとばちんとはねてしまうから近づかない。そういう孤立的な教育観をもっている。

(19 ページ)「地域の子どもたちの様子」となると、「子ども同士が仲良く遊んでいる」を選んだ人と「子どもの姿を見かけない」を選んだ人と、ふたつに割れています。子どもに関心がある人たちと、子どもに関心のない人たちの姿に割れていると見れます。

3つまで選択ですので、子どもの姿を見ないという人は、ほかには「地域の子どもに関心がないからわからない」の方面に出てくる。「子どもが仲良く遊んでいる」姿をよく見かけるとい人たちは、「スポーツ活動などでよく体を動かしている」次は「マナーがよくない」と続きます。スポーツ活動は地域の学校などでの活動として見かけることだと思います。その次に「マナー」のことが気になるという。検討の必要がある項目だと思います。委員の皆さんの意見を伺いたい項目です。

(20 ページ)「子どもたちのおもな遊び場」では、これは果たして地域の人たちの責任なのか、行政の責任なのかということですが、「家の中」と「家の前の道路」が非常に多い。これも3つまで選ぶので、次の「公園や整備された広場」などの数がもっと伸びていいかと思いますが、家の中、家の前の道路が多い。

絶望的なのは、「駄菓子屋」がない。選択肢として選んだのが正しかったかどうかというくらい反省を迫られるような状態です。ただ救われたのは、ショッピングモールなどはまだ1割程度、公民館や児童館などの公的施設が 8.5 パーセントということ。ショッピングモールやスーパーマーケットが多くなかったというのは救いだと思いました。ただ、コンビニエンスストアの 5.3 パーセントを合わせると 15.4 という数字になります。

(23 ページ)「地域の子どもたちとの普段の接し方」のなかで「危険な行動をみたとき注意する」のは、50 パーセント以上が「している」、「良いことをしたときにほめる」は 42.3 パーセントです。地域社会の教育力は、「注意する」方にウエイトをかけていると受け取れます。

(25 ページ)「様子が気になったとき声をかける」では、「する」が 34.9 パーセント、その前の「道であったときあいさつする」は 65.5 パーセント。合わせて考えると、あまり子どもの様子は気にならないけれど、とりあえず会えばあいさつするというふうになります。そして、「困っているとき相談にのる」は 17.9 パーセントでほとんどが相談にのることがないということです。個人主義の浸透が理由だ、しつけ・マナーが大切だと言う一方で、子どもたちの内面形成には関心が低い。以上。

続いて雲尾委員からお願いします。

(雲尾委員)

(27 ページ) 問 15 以降の「地域の子どもたちとかかわる活動」についてでございますが、上2つの「子どもたちにスポーツを教える活動」「子どもたちに祭りや伝統行事などを教え伝える活動」、いわば伝統型といいますか、少ない中でも多いわけですが、だいたい周辺部、旧新潟市内でなく周辺部で高い、子どもがいる人が高いという傾向がありました。「学校支援ボランティア」「親子のふれあい交流活動」「通学時の見守りなどの活動」が少し多く見えますが、近年の、開かれた学校、地域協働型のかかわりというようなものも、旧市内よりも周辺部が高いという傾向がありました。

「参加していない」については、区ごとにはほとんど差がないので、参加しない人はこのぐらいいるということです。ただ、中学生以下の子どもがいるかどうかでいうと、「いる人」が 47.7 パーセント、「いない人」は 74.6 パーセントと、ここは明らかに違う。ただ、子どもがいる人でも 47.7 パーセントの人がまったく参加していないということなので、もう少し差がついてほしかったというところが正直なところでは。

(28 ページ)「活動に参加したきっかけ」では、数字が低い選択肢では区ごとの差、職業的な差はほとんど出てこなかった。数字の高いところで見ていくと、「地域で活動することに関心があった」というのは 50 代よりも上の人たちに多く、50 歳を過ぎてくると地域のことに関心が向くのかという傾向はありそうです。「身近に一緒に参加する仲間やグループがあった」は秋葉区が高く、「家庭において参加できる時間のゆとりがあった」は南区が高く、「頼まれた」は江南区、南区が高いので、そちらは、そういうネットワークがそれなりにある人が多いのかという形です。

(29 ページ)「今後の活動参加意向」ですが、「わからない」という人たち (22.2 パーセント) をいかに参加させていくのかということになると思います。「今後参加したいと思う」の数値で違いが出てくるのは中央区が低く 46.4 パーセント、秋葉区は高く 68.8 パーセント。秋葉区の方は今後も多

く参加するようだけれど、中央区は半分以下という傾向がある。

(30 ページ)「今後も活動に参加したい理由」では、「参加した大人同士で人間関係が広がった」というのが一番多いわけですが、これなども江南区が高く、西蒲区が低いのですが、その辺は解釈ができてくいで、あまり触れない方がいいのかという気もします。「子どもたちとの活動が楽しかった」が多いのは江南区、南区。「子どもがいる、いない」で見ると、「参加した大人同士で人間関係が広がった」というのは子どもがいる方々に多く、「参加した大人同士で人間関係が深まった」のは、子どもがいない方々が多い。そして、「子どもたちとの活動が楽しかった」については、当然ですが、子どもがいない人たちの方が高いということになります。「地域の様子がよく分かるようになった」というのは子どもがいる人たちです。居住年数の方が問題かもしれませんが、そんな傾向があるということです。

(31 ページ)「参加したいと思わない理由」、次の「参加しない理由」については全体結果のとおりです。

33 ページ、「今後、参加してみたい活動」では、「学校支援ボランティアとしての活動」「地域の人や親子がふれあい交流する活動」「自然体験」で、子どもがいる世代が高く、やりたいと思っている。区ごとの違いですと、「地域の人や親子が交流する活動」は南区が高く、「子どもたちが自然体験をすることを手伝う活動」は秋葉区で高く、「子どもたちの通学時の見守りなどの活動」は北区で高い。逆に中央区や江南区は「見守り活動」が低い。これは、先ほど真柄委員から、江南区では安全に対してあまり心配しないというお話が出ましたが、それと一致するのではないかという感じを受けました。

34 ページ「地域全体で力を入れたらよいと思うこと」では、「仕事と家庭の両立ができる支援」、「子どもたちの居場所や遊び場所を作る」が東区で高い。経済状況の部分や、子どもたちの施設等が少ないというのが、アンケートで立証されているのかと思います。「仕事と家庭の両立ができる支援」は、子どもがいる世代でも回答が高かった。そういう意味では、まだまだ子育て世代は仕事の方に追われているのではないかなというところがございました。以上が、ざっと見たところです。

(相庭議長)

ありがとうございます。以上、3人の各担当部分ですが、ざっと見た感想を述べていただきました。ほかの委員方のご意見をいただきたいと思います。

(藤澤委員)

一つ確認ですが、資料2、資料3について議論する場というのは本日だけなのか、それとも今後でも予定されているのでしょうか。

(生涯学習課長)

本日までと考えていただいて、あとは三人の検討委員のまとめと、事務局のデータのまとめ、それからコメントとさせていただこうと思っています。ただ、それは『報告書』という形でまとめることであって、建議にどう生かすかということについては、来年度も引き続き議論していただきたいと思っています。

(真柄委員)

全体にかかわるのことで、業者の要約についてです。「その他の意見」の中のごく少ないところまで取り上げているところがあります。逆に、全体だけではなくて、男女などで見えるものがあるところは載せるとか、目立ったものだけを載せる。地域、地域を出し過ぎると問題になるところは気を付けなければならないと思うのですが、職業別、年代、特に年代と性別は最低限入れてもいいような感じがします。「その他」の何でもなしものを取り上げてあたりしてアンバランスに感じます。

(中村委員)

今、それぞれの方々が指摘なさったようにクロス表から分かることは、実際にどういうふう提案していくか。非常に役立つ部分、今お話くださったことは大事だと思うので、全部載せる必要はないですが、おもだったものをこれとは別に分析という形でとれるかと思いました。今お話ししてくださった主なものを報告書に入れておいた方が、提案するとき役立つ資料になる。どういう形で載せるのかということをお聞きしたいのですが。

(生涯学習課長)

報告書の形式は、グラフがあるものについて記述をしていきます。今、真柄委員からご指摘がありました。資料2では全体結果しか書いていません。その辺については特徴のあるものについて、せめて男女、年代について触れられるかどうか検討していきたいと考えております。検討委員のまとめについては、分担をしていただいた考察を報告書に載せていきます。つまり、調査の結果は、グラフと男女年代別の数値を単純に表していく、それについての考察を検討委員から分担して書いていただくという報告書の形態になります。

(中村委員)

以前、「生涯学習市民意識調査」をやったときには、区のクロス表から分かるようにと書いたと思うのです。そこも大事だと思います。客観的なデータなので、それを出して区の特徴というものがあつたら、分析にあつたようなものは載せていいのではないかと思います。データを踏まえたとえで。もちろん配慮が必要なものに関しては、載せないという判断はあると思います。

(生涯学習課長)

それは検討委員の分析報告の中に触れられるようなものであれば、載せていくという考えです。

(相庭議長)

僕の方で思ったのは、読み方に違いが出ると思うのです。私は社会教育学会の、どちらかと言うと、社会教育理念を大事にするものですから、データを読んでいくときに、例えば、ウエイトが選択肢の中に置かれている。社会教育は何のために戦後スタートしたのかというところをおいて読んでいるのです。立場が違ってきますと、学会は学問方法、あるいは社会生活に対する意識が違ってきますと、僕はそちらの方にウエイトをおいたのです。「社会生活に必要なルール・マナーを身につける」という人もいますから。どこまで踏み込んでいいのか。社会教育委員の会としての全体的な報告を出すのか、それとも、社会教育委員の会の委員の一人、個人個人で出すのかで違ってくる。社会教育委員は、委員の個人個人が社会教育の推進に対して責任を持つという形での行政的独立と、公的な縛りからの自由がある。それで、その委員は社会教育全体について意見交換する場として、社会教育委員の会議というのが設置されているのです。

(生涯学習課長)

議長のご意見は分かります。そうすると委員の方たちのそれぞれの分析に対する視点などを個々に全部載せていくという考え方が正しいかと思いますが、3章に分けてそれぞれ分担していただいて、それぞれ、調査の結果はどうであったか、客観的に数字から出していただいた分析が、まずはいるのではないかと思います。

(相庭議長)

そうすると、データから読む必要はないということですね。感覚的にこの場合はこうであり、この場合はこうであり、男女差もあるという読み方をすればいいということですね。

(生涯学習課長)

データから読んでいただきたいということでございます。

(相庭議長)

それからどう読むのか。データは出てきていますよね、この傾向が強いというのが出てきます。それから何を読むのですか。

(生涯学習課長)

データから出てきた結果について、委員としてのご意見をいただくということです。

(相庭議長)

意見がいますよね。その意見は、個人でいいのですかと聞いているのです。

(生涯学習課長)

今日、各委員の皆さんからのご意見をいただいたものの中から、それを参考にして最終的には委員の個人としてのご意見になると思います。

(相庭議長)

書くということですか。

(生涯学習課長)

調査報告を参考資料として来年度の建議にまとめていこうということですので、単純に男女、年代、区などの集計と、やはり3人の検討委員から結果をまとめていただきたいと思っております。

(相庭議長)

そうすると、少し方向性が決まった段階で議論する必要が出るかもしれませんね。各委員の意見については、この時間内だけでは、意見のバランスとかウエイト、そういうものを整理しませんと。文章でおこすとなると苦勞するかと思います。

(生涯学習課長)

この調査は家庭と地域の教育力の基礎データです。社会教育委員として今後どういう施策を提言すればいいのかを建議としてまとめていただく時期が来年度に来ます。その資料として活用してもらおうということで、3人の検討委員からはもう少しどの設問にどのクロス集計から特徴的なものがとらえられるかということについて検討する会議を持たせていただき、調査結果だけのまとめにして作り上げたいと思います。

(相庭議長)

建議を作るための基礎データとして使う。どう読むかというのは、調査データの解き方です。基礎データとして、あまり自分の視点を埋め込まないで読むことは可能です。その辺のところのウエイトの置き方として、今の社会と社会教育の理念、今の社会に対して社会教育委員がどうあるべきなのかというのが、私の場合どうしても出ますので、そこで確認しました。

(生涯学習課長)

まとめに際して、その視点を教えていただく検討会を3人の検討委員からは別途に一度会議を持たせていただいて、報告書にまとめたものは、以降、議論する機会を設けていくということによりよいでしょうか。

今後、青少年団体、企業やNPOなど様々な調査結果が出てきます。読み込みは分担していかないと大変かと思しますので、その辺は事務局で準備させていただきます。

(藤澤委員)

報告書の体裁としては、資料2、資料3をまとめた形の報告書を23年3月の日付で出すということによりよいですね。そうすると、本日、お話しするのは、コメントについて、このような見方ではというのがあれば意見をいうということですね。

5ページの(回答者の構成の中の)地区の記載についてですが、これは標本数が初めから違うので、このコメントではおかしいのではないかなと思いました。

(相庭議長)

そのとおりですね。ほかに、いかがでしょうか。

(藤澤委員)

4ページの(回答者の構成の中)性別ですが、回答率に男女の差が圧倒的にある。標本数に出した方は男女同数でしょうか。その辺のところも、あってもいいのかなという気がします。

(生涯学習課長)

住民基本台帳の男女別を比較してみます。

(相庭議長)

ほかにはよろしいでしょうか。

では、アンケートの取扱いにつきましては、生涯学習課長がおっしゃったとおりということで、また何かありましたら、皆さんにご相談申し上げたいと思います。

企業ヒアリングについてということで、事務局から説明があるようですが。

(生涯学習課長)

企業の訪問ヒアリングについて、当日配付いたしました資料10をご覧ください。全部で11社リストアップしてございます。11社すべてにご了解いただいているわけではなく交渉中です。この11社を選んだ理由は、右端欄の取組内容をご覧ください。今のところ問い合わせをしますと、日程が合えばとご了解をいただいております。委員の皆様方から訪問調査をしていただくことになっ

ておりますので、よろしく申し上げます。ついては、日程表を用意いたしました。日程は3月まで用意しました。ご記入のうえご提出をお願いします。組み合わせはこちらで調整させていただきたいと思います。よろしいでしょうか。ご希望がありましても先方と委員との日程が合わないと難しいので、申し訳ございませんがよろしく願いいたします。

(相庭議長)

企業候補リスト、これでよろしいでしょうか。候補は11社です。委員の皆様は日程表のご提出をお願いします。

(伊藤委員)

時間は半日くらいかかりますでしょうか。時間帯なども。

(相庭議長)

午後半日くらいでしょうかね。

(事務局)

実際には1時間程度になるかと思えます。先方も長い時間を取ることが難しいのではないかと考えています。

(相庭議長)

続きまして報告事項に移ります。平成22年度第41回関東甲信越静社会教育研究大会(東京大会)に、笠原委員と西田委員がご参加いただきました。いい報告が出ているようでございます。ご報告をお願いします。

(笠原委員)

昨年の11月に第41回関東甲信越静社会教育研究大会に参加させていただきました。西田委員が詳しいレポートをあげておりますので、内容はそちらにお任せすることにして、特徴的なところだけ少しお話をしたいと思います。

まず、会場が東京というのは初めてだそうです。それと今回は、持続可能な大会を目指したということで、参加費だけですべて賄ったそうです。多分そういうこともあって、スケジュールにアクションや夜の情報交換会というものは一切ありませんでした。そのかわり時間いっぱいまでパネルディスカッションがあり、内容が刺激的なこともあって大変、聴きごたえのあるものでした。2日目の分科会ですが、杉並区の社会教育委員の会が少し前に「やりとりの復活」を提言していますので、その「やりとり」を全ての分科会で取り入れていたと思いました。私は第5分科会に出たのですが、パネラーに郷土資料館の館長さんが入って入って、社、社連携の話をされたのが印象に残りました。また、終了後にお弁当をとって「車座談議」をしませんかという呼びかけがありましたので申し込みをしましたが、杉並以外の参加は、埼玉の方と私の2人だけでした。でも、折角の機会でしたので杉並で取り入れている「子育て支援のポイント制」について聞いてみました。これは、全国的にも非常に珍しい取り組みだと聞いていたのですが、区長が変わったり、仕分けの対象になったりで今後の予定は不明という答えでした。後は、お手元の報告書をお読みいただければと思います。

次期開催は茨城県で、8月25、26日だそうです、今のところ公民館大会と一緒にそうです。

(相庭議長)

ありがとうございます。西田委員、よろしく申し上げます。

(西田委員)

参加させていただきありがとうございます。感動しました。あんなにおもしろいシンポジウム、パネルディスカッションはここ最近、出たことがないのではないかといいくらい、会場全体の熱気が伝わってきました。

パネルディスカッションでは「今の社会は、社会の構成員を育てるような社会になっているのか」という問いかけが非常に重く、地域社会の共同体崩壊で、子どもが本当の社会人になっていないのではないかといい問いかけがありました。先ほど相庭議長からもお話がありましたが、私たち世代は団塊ジュニア世代で、まさにサービスを受益するという意識というか、行政サービスをただ受けるだけという意識が強い世代。先日、秋田でまちづくりの会に私も寄せてもらって話したのですが、

昔の商店街はよかったというような商店街の記憶がそもそもない世代です。なので、どういうふう
に作っていったらいいのかというのが私も分からないときがあります。そういうのを踏まえ、迷惑
をかけあって生きるのが地域社会という話もありました。新しい商店街というのでしょうか、地域
共同体の新しい形を探っていきたいと思いました。

2日目の分科会は笠原委員と同じ分科会に出ました。一番印象的なのは「地域の人に役に立ちたい」という人よりは、「地域に自分を救ってほしい」というようなお年寄りの方の参加が多かったという話には驚きました。やってみて分かったということだったので、コミュニティが崩壊しているということのは、若い子どもの世代だけではなく、大人の世代にも非常に重くなっていると印象がありました。私自身、教育をバネにコミュニティ創造とコミュニティ創造をバネにした教育の改革をビジョンにしているので、これにすごく共感しました。

大会前日には、番外編として報告書に書きましたが「NPOカタリバ」の社会人向け説明会に出席してきました。「カタリバ」というのは、高校の2時間の進路授業の枠をもらって、大学生が人生を紙芝居風に語るという活動を7～8年やっているところです。よくある進路指導、講演会、一方的に講師が話しているだけで、聞いていない人の方が多いのではないかというようなものではなくて、4～5人が車座になって紙芝居で語るような活動をされています。心を開かなければ、入ってくるものがないというような理念に共感して、私もやっていきたいと思いました。

(相庭議長)

お二人の報告から会場の様子が伝わってくるようでございます。

何かお聞きしたいことはございませんでしょうか。

以上で、予定されていた協議・報告を終了いたしたいと思えます。

(事務局)

議長、一つよろしいでしょうか。戻って恐縮なのですが、企業訪問調査につきまして、確認とご連絡をさせてもらいたいのですが。まず、確認ですが、先ほどの調査票(案)につきまして、委員からのご意見踏まえて事務局で修正するということをご了解いただいてよろしいでしょうか。

(相庭議長)

よろしいでしょうか。修正したものについては了承するというところで結構でございます。

(事務局)

本日の博進堂につきましては、今日の内容をまとめたものを後日お送りさせていただきたいと思えます。実際のヒアリングに行く際には、事務局も同行いたしますが、基本的には社会教育委員の聞き取り、まとめを行うという形でお願いしたいと思います。候補リストは11社ですが、博進堂につきましては、今日をもちまして終了ということになります、残りは10社です。今年度中に3～4社、残った分につきましては、次年度早々にと予定しております。よろしくお願います。

(相庭議長)

要するに、責任を持ってレポートを書けということでございます。よろしいでしょうか。

では、以上をもちまして、予定された審議はすべて終わりましたので、ここで事務局に返ししたいと思います。

あと、次回日程について3月17日(木)で予定しておりますが、議長、副議長の日程が厳しいためここで変更の調整をお願いしたいのですが。—調整—

(事務局)

以上をもちまして、本日の会議を閉会したいと思います。

次回は、今ほど変更調整しましたとおり3月22日、火曜日午後2時半から、終了後に情報交換会を開催したいと思いますのでご予定ください。ありがとうございました。